

3. 11を学びに変える

“Turning "3・11" to Learning”

認定 NPO カタリバアドバイザー
 小さな命の意味を考える会 代表
 佐藤 敏郎

1. ガレキの中の新学期

2011 年 3 月は、牡鹿半島にある女川第一中学校（現女川中学校）に勤務していた。女川は町全体が流され、大きな被害を受けた（建物の 8 割、人口の 1 割近く）。

あの日は卒業式の前日で、会場準備の最中だった。高台の学校のさらに裏の山に避難し、おもちゃのように流される町を生徒と一緒に見ていた。災害は何気ない日常を襲い、大災害は日常を奪う。壊れたガラスを入れ換えて元通り、ではない。二度と見られない風景、二度と住めない家、二度と会えない人になる。

絵を描いた生徒がいた。ガレキだらけの町を子どもたちがみつめている絵。後ろ姿なので泣いているのか、目をつぶっているのか、表情は分からない。子どもたちは手をつなぎ、スコップを背負っている。「生きることは大変だが、一人ではない」と教えてくれた。

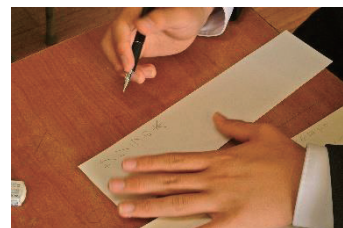


その中で新学期スタート。何もなくなったガレキだらけの町に、丘の上から子供たちの元気な声が降り注いだ。それが、どれだけ町民を勇気づけたか計り知れない。

一方で、この現実を生徒をどう向き合わせるか悩んだ。ほとんどの生徒が家を失い、身近な人を亡くしていた。

まだ2カ月しか経っていない5月、国語で俳句づくりの授業をすることになった。言葉にしていえるのだろうかと不安だったが、生徒はすぐに指折り数え、言葉を探し始めた。

「故郷を 奪わないでと 手を伸ばす」
 「ただいまと 聞きたい声が 聞こえない」
 「みんなの前 笑えているかな 自分の顔」
 「みあげれば がれきの上に こいのぼり」
 「複雑な思いで見つめる 春の海」
 「見たことない 女川町を 受け止める」



生徒たちは、誰もが目を背けたくなくなるあの状況にしっかり向き合って言葉を紡いだ。書きたくない場合は書かなくていいと言ったのに、全員が提出した。

2. 五七五に込められたもの

「窓ぎわで 見えてくるのは 未来の町」と詠んだ生徒がいた。窓から見える風景はガレキだらけだったはずである。その中に未来の町を思い描いていたのだ。

「夢だけは壊せなかった大震災」という句は、みんなの標語のようになった。この生徒の将来の夢は「岩石学者」。句と一緒に新聞で紹介されると、全国から岩石が送られてきたという(笑)彼は現在、大学で岩石を研究している。

「みあげれば がれきの上に こいのぼり」5月の連休、ガレキだらけの町をとぼとぼと俯いて歩いていた。下ばかり向いてはダメだと思って顔を上げたら、壊れたビルの上に誰かが上げた鯉のぼりが泳いでいたという句だ。難しい言葉は使っていないが、あの時の悲しみ、無力感、津波の破壊力、希望…みんな詰まっている句である。

半年後の11月(震災から8か月後)にも同じ授業を行った。「あのときは無理だと思った文化祭」「弟と久しぶりの大ゲンカ」など、少しずつ回復してきた様子がかえり一方で「あの人が帰ってきた夢を見た」「震災で約束守れず今悲し」といった句も見られる。

母親を亡くした生徒がいて5月に「逢いたくて でも会えなくて 逢いたくて」という作品を提出した。彼女は11月に「受験生 私の夢を 届けるために」と書いた。

5月の授業では、ほぼ全員が津波を題材にしたにも関わらず「津波」という語が出てくる作品は数えるほど。人の死を詠んだ句も多かったが「死」「命」「犠牲」といった語は一人も使っていない。

女川中学校では、その後も半年ごとに全校で俳句づくりをしている。風景や心情の移り変わりが興味深い。

俳句は短いので掲示したりしてみんなで想いを共有することができる。「あ、自分と同じだ」「あ、こんな考えもあるのか」と一人一人が認め合うことができた。孤立しない、様々な考え方や価値を認め合う。災害がなくとも教室はそうあるべきだ。社会全体にも言える。女川の中学生在が詠んだ句は、28年度から国語の教科書にも掲載されている。

その取り組みもあって、女川の生徒は想いに蓋をするどころか、積極的に津波の話をするようになった。悲しみを繰り返さないための津波対策案を、町長や町議会に提案するなどいろんな活動を展開した。

町内21か所の浜すべてに石碑を建てる「いのちの石碑プロジェクト」。募金により、1000万円の資金を半年で集め、現在は場所が決まったところから次々に石碑が設置されている。

3. 16歳の語り部

次に転勤した東松島は女川と違って、壊滅した地区と被害のなかった地区があり、

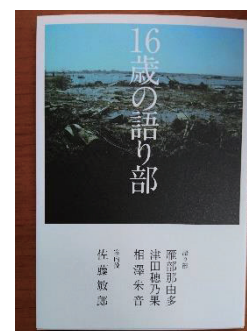
教室ではなかなか話ができなかった。

小学5年で震災を体験した3人の生徒と出会った。つらい出来事や、親友が亡くなった悲しみを誰にも言えず、「自分は生きていていいのだろうか」ということもあったという。

その後、いろんなきっかけで話をするようになり、高校1年生の時に東京で発表する機会を作った。あの体験は黙っていればただの「嫌な思い出」だが、言葉にすることで、頷いてくれる人がいる、悲しみを少しでも減らせるかもしれない。そうしたら「価値のある情報」になると彼らは語る。

2016年「16歳の語り部」(ポプラ社)という本を出版。その年の11月には高知で開催された「世界高校生津波サミット」で、日本代表としてプレゼンを行った。

女川の生徒も東松島の生徒も「3.11は足かせにならなかった。生きる指針になった」と語っている。あの日を語ることはつらいが、いつの間にか未来や希望の話になる。強制をすることはないが、話したいと思ったときに、そばで耳を傾けてくれる存在がいればよい。そういうネットワークを構築したい。



4. 大川小学校

次女が通っていた石巻市の大川小学校。今はポツンと壊れた校舎があるだけだが、あの日まで町があった。そこにきれいな校舎があり、子どもたちが笑顔で学び遊んでいた。娘は一週間後の卒業式でピアノを弾くことになっていた。

3月14日の朝、学校に向かったが、堤防が消え、橋も折れていて、小さな船に乗せてもらった。土手の上にブルーシートが敷かれ、泥だらけの子どもたちが並べられていた光景は忘れられない。

全校児童108名中74人が犠牲になった。(70名死亡、4名行方不明)校庭にいて助かった児童は4名だけ(欠席、早退の子もいる)。教員は11人校庭にいて10人犠牲。自然災害による被害であると同時に、学校管理下での事故でもある。学校管理下で犠牲を出した学校は大川小だけだ。

前例のない事故で、どう受け止めればいいのか今も迷っている。当事者はもちろん、一般の人も、行政も、報道も。新聞やテレビにもとりあげられるが、多くの人に覚えていてほしい反面、そっとしてほしい気持ちもある。大川小の校歌は「未来を拓く」というタイトルだ。あの命、あの出来事に、未来につながる意味づけをしたい。



大川小は海から3.7km離れているが、流れてきた大量の松の木等が橋にへばり

つき、巨大なダムのようになって水をせき止め、溢れた波が大川小を襲った。津波が到達したのは 15:37。地震から 51 分あった。そばには体験学習で登っていた緩やかな山もある。スクールバスも待機し、会社からは無線で逃げるように指示が出ている。迎えに来た保護者が「ラジオで津波が来ると騒いでいる、山へ逃げて！」と進言した。子どもたちも「山に逃げよう」と訴えた。



しかし、校庭から動かなかった。ようやく避難を始めたのは津波到達の 1 分前。向かったのは山ではなく、津波があふれてきた橋のたもとである。しかも、狭い通路を 1 列で進んだことが分かっている。

子どもを守りたくない教師はいない。津波が襲った時、教師はきっと子どもたちを抱きしめたに違いない。でも、8 m の津波を目の前にしたら、いくら抱きしめても救えない。

彼らは波に飲まれる瞬間、後悔したはずだ。彼らだけではない、私を含めた全国の教育関係者が後悔し、責任を感じている。仕方なかったなんて思っていない。検証とはその後悔に向き合うことである。後悔しているのは 1 分間必死になって逃げたことではない。50 分間動かなかったことだ。逃げた方がいいと考えた教員もいたが、その危機感が組織の意思決定につながらなかったのだ。

もっと後悔していることは 3.11 以前のことで。99% の確率で大地震、津波が来るという想定のもと、県も市も対策を見直すように再三各校に指導していた。見直したことによって適切な避難をし、子どもを救った学校もある。大川小の体制は不十分・杜撰だったことが指摘されている。問題はなぜそうなったのかである。

あの日の校庭には「時間・情報・手段」が揃っていたのに、子どもを守れなかった。校庭のすぐそばの緩やかな山を見るたび、多くの人は悔しさを覚える。でも、山が飛行機になるわけでも、エレベーターになるわけでもない。山は命を救わない。命を救うのは、山に登るという「行動」である。

多くの人が自分事として考えてほしい。すべての人があの日の校庭の子どもであり、先生であり、待っていた家族である。失われた命にしっかり向き合うことは、未来の命につながる。ところが、なかなか議論が進まない。教育委員会はまともに向き合わず、検証委員会も上辺だけだった。

前例のないことなのだから、違う意見や立場は必要だ。「対立」ではなく「調和」すればいい。ハモればいいのではないか。ハーモニーとはみんなで同じ音を出すことではない。自分の音をぶれずに出し、周りの音も聞くことだ。

前例やマニュアルにとらわれて、意見を言えなかったり、大事なものを最優先にできなかったりすることが私たちの周りにたくさんある。ハモるのは難しい。ついつい、私たちは同じ音を出したり、大きい声を出したり、耳を塞いだりしがちだ。みんなが

このままではいけないと思っていたのに、誰も言わず、どんどん時間が過ぎていったあの日の校庭と同じだ。

大川小の校舎内には子どもたちの名前のシールがきれいに残っている。あの子たちが今でも毎日ここに通っているようだ。ここは今でも学びの場だ。



5. 防災は「ただいま」を言うこと

当時中学生だった長女が作文を書いた。震災で、当たり前だと思っていたものが、実は当たり前ではなかったことに気づいた。「誰かやるだろう」「いつかやるだろう」と寄りかかっていたものを失い、バランスを崩したと。

あの朝、妹から「お姉ちゃん、おはよう」と言われたのに答えなかったことを、長女はすごく後悔している。大切なものはいつも大切。失う前に気づいてほしい。

防災は難しくない。「ただいま」を元気よく言うこと。あの日、言えなかった、聞けなかった「ただいま」がたくさんある。

震災直後に絵を描いた生徒は、5年経って20歳になった年「なみだはあふれるままに」という絵本を出した。悲しみに沈んだ女の子がやがて微笑むようになる絵本だ。悲しみは消えないし乗り越える必要もないが、悲しみは涙になってもいいし、ほほえみになってもいい。強さや学びになってもいい。



.....

1963年石巻市生まれ。2015年3月まで宮城県の中学校教諭。震災時は女川第一中学校（現女川中）に勤務。現在はNPOやラジオ等で活動。